

佳作

命の悲劇

北九州市立熊西中学校 一年

杉山 弥優

一、初めに

道徳の授業の最中、写真を見て泣きなくなつた。その写真には、爆弾によつて燃えた人、お腹から臓器が出てきている動物など、おびただしい量の「死」があつた。なぜだろう。なぜこんなにも殺さなければならないのか。なぜたくさんの方の命が犠牲にならないといけないのか。悲しみと同時に怒りまでもがこみ上がつてきた。「戦争を知らない。」それはとてもいけないことだと思ふ。

終戦から七十年が過ぎた今、体験者が少なくなり戦争

についてよく知っている人はいない。もしかすると、簡単にまた戦争が起きてしまうかもしれない。そうならな
いために、戦争のことをもっとよく知る必要がある、
私は心に強く思つた。

二、一変した八幡

ある日、戦争体験者が語る、戦争についての冊子「あ
の日 1945、8、8 八幡で何が起つたか―八幡大
空襲から70年―体験者が語る言葉の遺産」(地域の記憶
遺産を支える会)を読んだ。そこでは、ほとんどの人
が「戦争を絶対にしてはいけない」と語っていた。それ
だけ戦争は人の心に大きな傷を負わせたひどいものなの
だ。B-29による最初の攻撃目標となつた八幡は、その
頃「鉄の都」と呼ばれていた。きつと八幡製鉄所を中心
として町が栄え、人々が楽しく暮らしていたから、その
名がついたのだろう。そして、そんな楽しさを壊すため
に、八幡に雨のような焼夷弾が投下された。文章を読む
だけで、辛く、悲しく、恐ろしく思つた。

その中でも、特に寺坂カタエさんが語られたという次

の文章に目が釘づけになった。

「途中、内臓が破裂した牛や馬が倒れており、車体が焼け焦げた電車や立ち往生した電車が何台も停まっていた。桃園辺りに着いた時、顔面が血だらけになった人が狂ったように妹を探し回っていました。また、桃園から山手にかけて道の両脇の家はみな炎上し、市街地の大半は焦土と化していました。前田小学校は鉄筋の講堂だけ残してすべて焼け落ち、前田の官舎もみな焼けて、6軒に1つある井戸のコンクリートの屋根だけが点々と焼け残っていました。皿倉山の麓から製鐵所まですべて瓦礫と化し、熱風と立ちこめた黒煙で見通しが利かず、一体どこが道なのか、我が家の方向さえ分からない状態でした。その上地面は燃えつくように熱く歩けませんでした。」

なんという悲惨な状況だろう。今までテレビやビデオなどでこのような惨状は目にしてきたつもりだった。でも、それが私の住んでいる八幡で起こった現実であると思うと、胸が張り裂けそうになった。

その後、この話を語られた寺坂さんが、私の学校の近くに住んでいらっしやることがわかった。年齢は、現在九十四歳。ということは、七十年前のことを今でもこのようにまざまざと記憶していらっしやるということなのだ。

三、体験者から聞いた八幡

私は、実際にお会いして、もっとお話をおうかがいしたいと思い、同学年の生徒と二人で寺坂さんのお宅を訪ねた。二人で用意した質問は、以下の十だった。

① たくさん爆弾を落とされた八幡は、どのくらいバニック状態だったのか。

② 戦争中に食べていた「こうりゃん飯」とは、どのようなものなのか。

③ 戦争中は、自分の心配と家族の心配ではどちらが大きかったのか。

④ 目の前で人が死んでいくのを見て、どのように感じたのか。

⑤ 戦争中に、人が人でなくなるような瞬間を見たの

か。

⑥戦後、多くの人は犠牲になったのに、自分だけ生き続けていいのかという罪悪感はあったのか。

⑦今でも戦争時の辛いことを思い出すのか。

⑧「戦争」とは何だと思うのか。

⑨「戦後七十年」という節目を迎えて何を感じるのか。

⑩私達の世代や親の世代が戦争のことをよく知らないことについて、どう感じるのか。

初めての出会いだったが、

「知っとることなら何でも話すよ。」

と言って温かく迎えてくれた寺坂さんは、優しく質問に応じてくださった。

①たくさんの爆弾を落とされた八幡は、どのくらいパニック状態だったのか。

それはもう、とてもパニック状態になっていた。夜は、毎日のように皿倉山の方からB―29が来ていたらしい。当時の小学校では、耳を養い、爆音を聞き分けるた

めに毎日朝礼後、聴音訓練をしていたそう。みんな本気で取り組み、子どもながら戦争訓練をしていたようだ。

②戦争中に食べていた「こうりゃん飯」とは、どのようなものなのか。

兵隊に米をさし出し、米を育てる農家の男性は、戦地に行き、米が少なくなり配給制になった。一人分は、一日二・七合。そのとき、ご飯のかさを増すために、「とうきび」に少し似ている「こうりゃん」も混ぜて、ごはんを炊いたという。色は赤色で、とてもまずかったそうだ。

③戦争中は、自分の心配と家族の心配ではどちらが大きかったのか。

B―29の爆弾が雨あられのように降ってくる中、みんな自宅の防火水槽に逃げこんだ。その水槽は、学校のプールほどの大きさで、足も届かない。その水槽のふちに片手の指先だけでつかまり、初めは、もう片手で自分や子どもに水をかけていた。ただ、猛攻撃で生きるか死

ぬかの瀬戸際になれば、人間は自分の命のほうが大切になり、結果的には子供まで見捨てるようになってしまうこともあったらしい。でも、それを誰も責めることはできない。それが戦争という現実のようだ。

④目の前で人が死んでいくのを見て、どのように感じたのか。

近所にいた人たちが、次々に死んでいき、恐ろしいと思う暇が無かった。かすり模様のような焼夷弾が小さな部屋に三十六発落ちてきたらしい。その部屋は畳十枚半の部屋で、計算すると、畳一枚あたり約三発の焼夷弾が落ちてきたということになる。何十年もの苦勞をかけて築いてきた財産は、わずか一時間で全て灰になった。今では絶対ありえないことだと思うし、とても絶望的になったと思う。

⑤戦争中に、人が人でなくなるような瞬間を見たのか。何度も見た。自分が生きるか死ぬかの限界に立ったとき、人間はどうしても自分を取ってしまうらしい。理屈ではいくら正しいことを言っても、現実ではそうできない

のが人間の本性であり、それが悪いとは誰も責められない。生きるか死ぬか、のときに自分を守るのは、人間の本能である。寺坂さんも配給された赤ちゃんのミルクを、「私が飲めば、お乳になるから。」と自分に言い聞かせて飲み、その分力強く家族を支え続けたそうだ。

⑥戦後、多くの人は犠牲になったのに、自分だけ生き続けていいのかという罪悪感はあったのか。

そんなことは、考えないようにしている。小伊藤山公園の防空壕で三百名以上の人が酸欠状態で亡くなり、町内の人たちもたくさん亡くなられた。とてもおぞましく、悲しかったという。でも、そんな中懸命に生きてきたことを誇りに思っていると言われた。私達の中学校では、毎年七月に小伊藤山公園で亡くなった方々に供える折りづるを全校生徒で折っている。そんなことを考えると、戦争は、やはりしてはいけなかった。

⑦今でも戦争時の辛いことを思い出すのか。思い出す。特に心に残っているのは、職業軍人だった夫との結婚。結婚休暇という一か月くらいの特別な休暇

の中で、寺坂さんとお見合いをして結婚した。戦争が終わり、夫が帰ってきて、まだ家や着るものが無く、寒い時期には夫婦二人そろって、ただブルブル震えていたそう。

⑧「戦争」とは何だと思うのか。

国民は、お国のために一生懸命に戦ってきた。「戦争をして悪かった。」「戦争はしてはいけない。」と後から言うのは簡単だ。だが、戦争は、そんなに簡単に片付けられるものではない。その言葉に私は驚いた。でも、当時の国民は、政府から言われるまま、みんな一生懸命に生きてきたのだと思う。「戦争」とは、すべての人から今までの日常生活を奪い去るもの。私はそんなふうに考えた。

⑨「戦後七十年」という節目を迎えて何を感じるのか。

戦争を経験したことは、ある意味では良かったと思う。運命の中で翻弄され、人には言えないような様々な困難とぶつかった。でもそこから力強く、立ち上がり、たくさんの大切なことを学ぶことができたそうだ。そん

なことを考えると、今の私たちや私たちの親の代は、そんな大きな困難に出会っていないから、立ち上げられるかどうか心配だと言われた。胸に突き刺さる言葉だった。⑩私達の世代や親の世代が戦争のことをよく知らないことについて、どう感じるのか。

別に、知らなくても良いと思う。平和な時代に生まれ、知らないのが当たり前である。知らないで済ませるのではなく、本で読んで興味をもったり、今日のように昔の人の話に耳を傾けたりしてほしい。今の時代、日本では戦争がないことが本当に幸せである。もし一旦戦争が始まったら人同士が互いに殺し合い、人を殺さなければ自分が殺されてしまう。今は幸せな時代だが、昔は「食うか、食われるかの時代」だった。でも、今の時代は確かに戦争こそないが、会社が倒産して無一文になったり、人からだまされて全財産を失ったりするようなことは起きている。そんな時に決してあきらめず、そこから立ち上げることが大切だ。だから、中学生には今しっかり勉強してほしいと言われた。まさにその通りだと実

感した。

四、もう一つの八幡を知って

道徳の授業では、写真や映像を見て感じとることぐら
いしかできなかったが、寺坂さんの話を聴くことで、ま
た違う視点から戦争を見つめ直すことができたと思う。

「戦争を体験した人からお話を聴くことができた。」それ
は、これからそう何度もあることではない。だから、今
回のこの八幡のもう一つの顔、決して忘れてはならない
大切な話を聴くことができて、本当に良かったと思う。

五、終わりに

日本には、「お国のために死ぬんだ。」と教えられた兵
隊や、「日本は絶対に勝つ。」と教えられた子供たちがい
た。残酷だと思った。時の政府に変な催眠術のようなも
のをかけられて、いつまでも現実に気付けなかったことが
…。そして間違いだと気付いていても、それを言うこ
とができなかったことが…。私たちが戦争のことを詳し
く知るといことは、戦争をまたすることを決して許し
てはいけないという責任を負うことだと私は思う。だか

ら、このことをたくさんの人に伝えなければならな
いと思う。

戦争が「悲劇」であれば、平和は「理想」である。命
を悲劇の舞台に立たせるのか、理想の舞台で輝かせるの
かは、私たちの意志にかかっている。